

場所が、三谷池の堤に続くところだけに三谷池の池普請にもこの石が利用されたのかも知れない。

三谷池は、寛永五年、西島八兵衛の普請である。その後享保十六年にも大々的に改修されているので、ともかく、そのどちらかの築造普請にはこの丁場が活況を呈したことであろう。

土地の人の話では、大正時代までここで採石されていたとのことだったが、今は青葉がくれになって、付近の人々からも忘れ去られようとしている。

石質は由良石に似た軟質の黒雲母安山岩である。

## 十九 船岡石

三谷池の西方には住蓮寺池―前池―平家池―船岡池と高松平野を潤す、主要な灌漑溜池が東西に連なるように並んでいる。その西端、船岡池のところに小丘が

ある。それが船岡山で、ここから切り出された石材が船岡石なのである。池に面した山の南側に数十丈の断崖となった石切場の遺跡が残っている。

ここは香川町―もとの浅野村であるが今はこの小丘のすぐ北側は高松市となっている。そのたたずまいが山というより、古墳のように見える丘である。事実ここは県史にも明記された積石古墳の遺跡地でもある。しかし、今は古墳の名残りらしいものは何一つ見当たらない。

山上には荒れ果てた祠が立っている。土地の人は、「粟島さん」と呼んでいるが、婦人病に効験があるというのでなんでも、女の人がお参りするところだ。山麓には荒神さんがあつたり、近くには船山神社もある。山のたたずまいや、周囲の状況から、それらしく感ずるが、こここの出土品が浅野小学校に保存されているという事実以外には別に古墳らしい確証もつかめない。附近の農婦の話では、

「昔、この山は船岡焼という焼物を出したところで、私のうちのじいさんが、その船岡焼きというものを、この山で拾った。じいさんはそれを大切に保存して

いたが、いつの日か、それが邪魔になるようなこともあつて棄ててしまった。

後に、県関係の人などが、それを見たいといつて訪れたこともあつたが、おしいことをしました」と、畑仕事の手を休めて、語つてくれた。

浅野村には天保年間―安助という男が浅野焼という、九州筑前の高取焼に似たものを焼いたということがあつて、そのことは讃岐名勝図絵にのつている。あるいは、その浅野焼のこと―それを船岡焼といつているのか、そしてその浅野焼を拾つたというのか―それも思つた。しかし、どうも、この山で拾つたというから或は古墳の出土品のことかも知れない。

山頂を南に行くと、思わず身ぶるいを感じるような数十丈の垂直な断崖がせまつて、行手は完全に遮断されてしまった。これが石切場だ。引き返して山を降り、南から山麓の細い一本の通路に出る。そこは、すぐ船岡池の水が、ひたひたと打寄せている。

その通路から改め石切場の跡を眺めた。ここも日山と同じで採石で断崖となつた。

柱状節理がすぐに船岡池にせまっている。昔の「池普請見積」という書にもこの船岡石の名が見えている。船岡池の築造は延宝元年である。「岡村記」に、  
〃延宝元年（一六七三）、時の郡奉行笹原四兵衛、森善太夫と香川東の代官林亦兵衛の指図によつて築造された池であること、その時ここに田地を持っていた、与兵衛と治郎左衛門、それに茂介、孫左衛門など地主百姓の土地が潰れてしまったことなど、詳細な記録がある。

して見ると、その時の池普請には、この石が利用されたのであろう。或はこの船岡石が、その頃からこの地域の石材として切り出されていたのかも知れない。この山の麓には、浅野の向井家の墓地がある。昔からずつとこの船岡山は向井家の所有地になっている。向井家は生駒牢人の家柄、生駒家が退転すると帰農して、地方の豪家となっていたが、文化文政の頃、多額の金子、（四千両）それに米穀などまで藩に献上している。その功によつて帯刀がご免、藩士の列に登った名家である。

その頃帯刀ご免、武士の待遇（俗に牢人株という）を得るには、「千両」が通り相場であつた。

向井家が、四千両の大金を献上しているところを見ると、あるいは持山の船岡山―その船岡石の切り出しが同家の世帯向に物をいつていたのかも知れない。四千両は四千石の高に相当するから、莫大な金額である。

ともかくそんなことから私は、江戸末期、船岡石は盛んに切り出されたに違いない。―そう考えても見た。

現在はもちろん、採石されていないので、この界隈に石材業者もいない。ただ一軒、船岡に石屋さんがある。新宮さんという。

今は庵治石の加工だけをしているが、先代の新宮六造さん（明治四年生まれ）の若い頃は、附近の人を多く雇つて盛んに切り出したものだという。当主は大正生まれで、物心ついてからは、もうこの山の採石はなかったというから石切場の廃止は明治の末年頃に違いない。その頃までは、庵治石、由良石と並んで、石垣、

台石、石碑などの外、広く土木に使用された石材であったが、日山石と同様、ここに、柱状節理を示す人工の遮断だけを残して昔の石切場の跡しのばせている。

ここの石は、日山石ともよく似た、黒雲母安山岩で灰色の石基の中に白い斜長石と黒雲母が班晶として散在しているが、その石質は由良石にくらべてやや軟弱である。

由良石は、同じ黒雲母安山岩ながら、石英を交えその良質のころは細粒花崗岩に似て、色も青味がかかり、黒雲母石英安山岩（英雲安山岩）というべきもので、質がやや硬いとされている。

船岡石の特徴とでもいうべき点は、凝灰岩質の石基の中に黒雲母にまじって、少量のザクロ石（ガーネット）が含まれていることだ。その岩片を割って見ると、小粒ながら黒紫色のザクロ石があるから、含ザクロ石黒雲母安山岩というべき岩なのである。

この石材の丘―船岡山はもと、船山と呼んでいた。古い香川県史に、

「この山は古の船山にして船山神社の鎮座ありし所なり」と記している。それを船岡山と改めたのは、讃岐名所図絵に、

「風景、山城の船岡山に似たり、よりて名とす……」とあつて、京都の船岡山に似ているので、船山を船岡山と改めたわけである。

京の船岡山は、「山州名跡志」によると、「その形が船に似て、東西二町、南北一丁ばかり」とある。なる程、浅野の船山も、東西に長く南北に短く、北から眺めると船形にも見える。

一書によると、「崇徳天皇の後嗣―近衛天皇の御陵で天皇を船岡山の西野に火葬す……」という伝説のあるところだ。

「山州名跡志」には、その記事はないが、塚山であるので、同書に、「船岡のすそのの塚の数そひて、昔の人に記をなしつる」西行

「はかなさは船岡山の夕まぐれ、しばしも絶えぬ煙にも知れ」為家  
という古歌を記している。

形ばかりでなく両者とも、塚や古墳というわびしい遺跡地であることも似ている。何一つ古墳としての出土品のなかった船岡山も、昭和八年、塩江街道の拡張工事の際、近くの田の中から山にあつた筈の舟型石棺が見つかった。いわゆる石船である。それを灌水用の樋に利用したものと見え、船の両端を切り開いている。もちろん、これは船岡山古墳の石船石棺である。それが心なしか、昔の農民が、いつとはなく溝水を田に引き入れる石樋にしていたわけである。その石樋となつた石船石棺が、この古墳の唯一の出土品となつて、今、浅野の小学校の校庭に保存されている。

山の形が船に似ているので船山といつたのか、石船のある山だから、ついた名なのか、その名の起源については、どちらとも考えられる。しかし、おそらく石船にちなんだ名であろう。

讃岐の考古学界では、讃岐に多い石船石棺―石をくり抜いた船形の石棺―国分寺鷲の山の石棺は勿論、高松の岩清尾山の石船、三谷の石船、船岡の石船、その



他すべて、現在も採石されている国分寺の鷲の山石（新名石）それで作ったもの、と説明している。すると、石船になる石材のある船岡にも遠く鷲の山から運ばれて石船を作ったことになって、いささか、不合理な点も感じられてならない。それも、鷲の山にの山麓に限って石棺造りの部民集落があつて、そこでなければ死者を葬る石船の製作が出来なかつたという確証があれば、別問題である。

大切な文化財である、その一部岩片を割って見るわけにもまいらず、古く風化で汚れた船岡の石船石棺―浅野小学校保管のもの―その石肌を眺めたばかりだが、私はこの石材が国分寺のものではなく、船岡山の石―そのものであると見た。

そればかりか、船岡に近い三谷の丸山に横っている石枕づくりの石船―それもその材質はどう見ても船岡石のように思われてならなかつた。

何分、高松の南方に見える山々には日山石、船岡石などと呼ばれる凝灰岩質の軟弱な安山岩―それが多い地域なのである。それらは古代にも加工に適した軟質の安山岩である。それが、その地域で使用されている。日山石や船岡石―と見る

のは不自然ではあるまい。これらは噴出岩なので、火には強く、加工し易い利点はあるが、その硬度と美観の点で、花崗岩ことに庵治石のような細粒緻密なものに劣り、時代とともに次第にその利用度や需要が減少していったのである。